

[ワークショップ1 / 子宮内膜症の癌化 Update (1) (疫学・自然史・病理・分子メカニズム)]

## 本邦における子宮内膜症の癌化の頻度と予防に関する疫学研究 (JEMS中間報告)

- 1) 鳥取大学医学部産科婦人科学教室
- 2) 群馬大学保健学科医療基礎学
- 3) 奈良県立医科大学産科婦人科学教室
- 4) 東京大学医学部産科婦人科学教室
- 5) 日本生命済生会付属日生病院

谷口 文紀<sup>1)</sup>, 原田 省<sup>1)</sup>, 林 邦彦<sup>2)</sup>, 小林 浩<sup>3)</sup>, 百枝 幹雄<sup>4)</sup>, 寺川 直樹<sup>1,5)</sup>

わが国において卵巣癌の罹患率は明らかに増加している。上皮性卵巣癌の多くを占める漿液性腺癌については、*de novo* 発癌が示唆されており、事実、発見癌の多くは癌性腹膜炎を伴う進行癌である。一方、卵巣子宮内膜症性嚢胞(卵巣チョコレート嚢胞)からの癌化が知られているが、その大部分は明細胞腺癌と類内膜腺癌であり、明細胞腺癌は欧米に比して本邦で頻度が高いことが報告されている。Sampson (1925) が子宮内膜症の悪性化を最初に報告して以来、Cornerら (1950) は癌化の頻度を0.7%、Scullyら (1966) は0.8%、わが国ではNishidaら (2000) が0.7%と報告している。これらの数字は、すべて後方視的に検討した成績であるが、卵巣癌の自然発生頻度に比べてこの0.7~0.8%の癌化率は非常に高いものであり、生殖年齢層のおよそ10%が本症に罹患するとされる現在、看過できるものではない。一方で、静岡県で行われた卵巣癌検診において、前方視的に追跡調査した小林らの報告 (2004) では、対照からの卵巣癌発生が0.012%であったのに対して、卵巣チョコレート嚢胞患者からは0.72%の卵巣癌が発生した。これらの背景から、世界初の前方視的研究「本邦における子宮内膜症の癌化の頻度と予防に関する疫学研究 (JEMS)」を企画した。

少子・晩婚化に伴い、子宮内膜症罹患率の上昇が危惧されているにもかかわらず、卵巣チョコレート嚢胞患者の癌化に関する情報は乏しく、本邦においても全国規模で検討された成績は皆無である。症例の集積に関して単一の施設では限界があることから、このような状況を打開するためには、できるだけ多数の症例の情報、およびその後の経過を検討していく以外に方法はない。そこで、全国の医療機関を受診した30歳以上の卵巣チョコレート嚢胞患者を対象に登録を行い、以下の3つの調査を行うことを目標とする。(1)卵巣チョコレート嚢胞の正確な癌化率を算出する、(2)患者背景の解析からリスク要因を抽出する、(3)嚢胞摘出術による癌発生の予防効果を探索する。今回は、2007年より日産婦学会・腫瘍委員会の班研究として発足したJEMS研究の進捗状況を報告する。2009年10月現在、各医療施設での倫理委員会承認が得られたのは50施設であるが、そのうち患者登録が開始されたのは25施設である。登録患者数は総数で450名と滞っており、目標の登録数にはほど遠い状況である。会員の先生方には、ますますの患者登録をお願いするとともに、新規の研究参加施設を募集したい。